ソルブ学校における言語とアイデンティティ

岡村 健介

ドイツ東部のラウジッツ地方では、西スラヴ諸語に属するソルブ語が話されている。ソルブ語話者は 5 世紀ごろから多数派であるドイツ人とともに生活してきたため、常に同化の危険に晒されていた。ソルブ語は消滅の危機に瀕する少数言語であるといえる。

私の調査は、ソルブ学校における言語政策に焦点を当てる。そのために、オーバーラウジッツにある 1 校のドイツ・ソルブ学校、2 校のソルブ学校で生徒、教員、保護者に対し質的および量的調査を行った。ドイツ・ソルブ学校（学校 A）では、生徒は外国語としてソルブ語の授業を選択することができる。それに対し、ソルブ学校ではすべての生徒がソルブ語を学ばなければならない。2 校のうち 1 校のソルブ学校（学校 B）は、ソルブ語がまだ日常言語として残っているカトリック地域の中心に位置し、すべての生徒がソルブ語母語話者である。もう 1 校のソルブ学校（学校 C）は、カトリック地域の外れに位置し、ほとんどの生徒が家庭ではドイツ語を話している。

私の調査によると、生徒のソルブ語学習の動機はいくつか挙げられる。最も多い理由は、家庭でソルブ語を話す機会があったというものだ。もう一つの理由は、ソルブ学校が自宅から最も近い学校だから、というものだ。学校 A ととりわけ B 学校の生徒は比較的強い民族アイデンティティを持っているのに対し、学校 C では、生徒のソルブ文化に対する文化的許容度が若干低く、ドイツ語を好む傾向がある。

また教員とのインタビューからは、ドイツ語への言語調整の傾向が見られ、ソルブ語使用はたいてい母語話者同士に限られることがわかる。非母語話者が会話に参加している場合、使用言語はドイツ語へと切り替わる。加えて、ソルブ語使用はソルブ語の運用能力とも関係がある。教員も生徒もソルブ語がうまく話せない場合は、ソルブ語を話したがらない傾向が見られる。

これらの学校の主な目標は、生徒のソルブ文化や他文化への寛容性を高めることだが、それは概ね達成されているように思われる。しかし、ソルブ学校が言語の消滅を食い止められるかどうか、また活発な話者を増やすことができるかどうかは不透明な部分も多い。